OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スペインルネサンス・人文主義の言語思潮
Author(s)	安達, 直樹
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 145-172
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7928
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スペインルネサンス・人文主義の言語思潮

安　達　直　樹*
ADACHI Naoki

Abstract:

Linguistic Thought of the Spanish Renaissance and Humanism

The present article examines the linguistic thoughts of the period of the Humanism and Renaissance in Spain comparing with the case of Italy. In Spain, in the end of the 15th century, the philologist Antonio de Nebrija introduced the humanisitic ideas born in Italy, and applied them not only to reform the education of the Latin or the studies of letters in general but also to create the grammar of a vernacular castillian language.

In Italy, already in the 14th century, there were great works of literature written by the three most brilliant authors; Dante, Boccaccio and Petrarca. Then during the next two centuries the debates surround the language got intense, and the intellectuals discussed the question of how to establish linguistic norms and codify the language, that is to say which dialect or speech of Italy —like the Tuscan－should be standard of the whole Italian peninsula.

This called «questione della lingua»“question of the language” no longer was a problem exclusively in Italy, rather than the problem of the whole Europe. In Spain, due to its proximity to Italy, that current of thought was introduced and developed pronto. But while then Italy was divided into a number of warring city-states that have distinctive dialects for each, in Spain, contrastively, there was a strong centralized government due to the union of Castille and Aragon in the latter half of the 15th century. This difference of political situations made different atmosphere in the debates about language in each of the two peninsulas.

I will describe what was the “questions of the language” and how developed this both in Italy and in Spain.

Keywords：question of the language, vernacular language, Renaissance, Humanism, Nebrija
キーワード：言語問題，俗語，ルネサンス，人文主義，Nebrija

＊　大阪大学外国語学部・非常勤講師

はじめに

本稿は，スペイン文法という一つの学問が Antonio de Nebrija によって創始されるにいたる経緯として，あるいはその前後にいかなる思想的環境がスペインにあったかということを問うものである。

ある時代，ある場所には，そのそれぞれに固有の，言語をめぐる思想があり，例えば15，16世紀にはイタリアにおける言語問題というものがあった。これは，ラテン語と俗語の優劣と共に，俗語間の競合，すなわちフィレンツェ語をはじめとする諸言語のうち，どれがイタリアの共通語となりうるかをめぐって繰り広げられた論争であった。このうち，ラテン語と俗語の関係については，すでに両者の間に明確な差異ができて久しかったが，このことはイタリアの言語に関してのみ起こることではなく，汎ヨーロッパ的問題であった。

本稿は，このいわゆる「言語問題」を，主にイタリアのそれとの比較においてスペインの中に見出すことを目的とし，ルネサンス期のスペインにおいて古典ラテン語と同時に称揚の対象となった俗語について，2つの側面から考察することにしたい。一つは，古典ラテン語と俗語との関係であり，もう一つは，諸俗語間の関係，すなわちカスティーリャ語と他のスペインの諸俗語との関係である。

1. ラテン語と俗語

まず，この時期のラテン語と俗語との関係について見ると，中世を通じてヨーロッパは，ラテン語と個々の俗語という2言語併用の状態にあり，公的文書や教育においてラテン語の使用は圧倒的であったが，人々にとってラテン語はもはや難解で，身近なものではなくなっていた。このことは，聖職者についてもいえ，スペインでは1228年のバジャドリッド公会議や，その後の公会議[1]において，「ラテン語を知らぬ者はこれを学習するよう要請され，ラテン語を話せるようになるまでは報酬を与えない」[2]という内容の教令が繰り返し出されており，このことからも，ラテン語に対する無知が普遍的現象として蔓延していたことをうかがい知ることができる。これが15世紀後半になると，神学者や法学者，医学者の間でさえも正確なラテン語の知識を持つ者は少なくなっていた[3]。さらに，当時の大学におけるラテン語教育に対しては，人文主義者たちが手厳しい批判を加えている。

1.1. ルネサンス・人文主義

1.1.1. ラテン語の復興

人文主義者たちは，中世の乱れたラテン語の使用と，その教育を改めなければならないと考え，古典ラテン語の復興に取り組むことになるが，その動きは，ルネサンス発祥の地であるイタリアで起こった。

文法学者であった Lorenzo Valla は，*De linguae latinae elegantia*『ラテン語の典雅』(c.1440)

1　1322 年バジャドリッド，1339 年トレド。
2　Nieto Jiménez (1997:82-83) 参照。
3　Girón Alconchel (1986:62) 参照。

を著して,「何世紀にもわたって，ラテン語を話すものはおらず，読んでも理解することすらできない。そのために自由学芸のみならず，絵画・彫刻のような諸技芸も，堕落し，ほぼ死に絶えている有様である」[4] と嘆き，ラテン語文献の正確な解釈のできない当時の法学者を罵倒している。そして，ローマ帝国後期のドナトゥスとプリスキアヌスといったラテン文法家たちを賞賛すると同時に, 中世の文法学者たち[5]に対しては強い拒絶の態度を示している。

Valla 同様に Nebrija も，当時の「スペインにおけるラテン語教育の危機的状況」[清水 1987:73]を憂慮して，1481 年に *Introductiones Latinae* 『ラテン文法』を著したのである。また，*Gramática castellana*『カスティーリャ語文法』に先立つ，*Introduciones latinas contrapuesto el romance al latin* 『ロマンス語に対置させたラテン文法』(c.1488) の中で，当時執筆中であった *Diccionario latino-español*『羅西辞典』の刊行をもって「文人としての仕事に就く者全員に挑発，挑戦をいどむ」と宣言している[6]。法学者や医学者に対するこのような挑発はいかにも先の Valla を彷彿させるが，Nebrija はさらに，その『羅西辞典』の献辞の中でも次のように中世の文法家たちを批判している：

> 「傲慢ぶらずに話すと，それは私を妬む者たちの証言や，敵どもの告白によってさえ，何もかもは私あってのことだと認められるほど，あの私の理論が素晴らしかったからであり, 私こそがラテン語の戦陣を張った初めての人間だからである。そして，なおかつ，スペイン全土からほぼ完全に，*Dotrinales* や Pedro Elías 氏，さらに我慢のならない Galtero 氏や Ebrardo 氏，Pastrana 氏といった者たち，そして，ここに名を挙げる価値もない見せかけだけの，出来そこないの文法家たちを私は根絶やしにしたからである」[7]

Nebrija は，中世的なラテン語の使用を「野蛮」と呼んで，これを排除すると豪語している[8]。このような Nebrija の活動についてラペサ（2004:284) は,「彼は大学教育の改革を企てるが，そのために，硬直した教授法を追放し，ロレンツォ・ヴァッラが編み出してイタリアにラテン語文化を再興するのに貢献してきた方法を導入した」としており，Hernández Alonso (1993:184) も，Nebrija が10年のイタリア滞在の経験から，古典ラテン語の知識とそれを範としてラテン語を再興するという Valla の指針をスペインにもたらしたとしている。

人文主義の思想としては，まずこのような古典ラテン語崇拝というべき思潮が起こったが，これは古代への回帰を目指すルネサンス思想の一つの現象であった。

4　榎本（1999:275)。
5　例えば Isidoro de Sevilla (600 年頃) や Evrehard de Betunia (1200 年頃) など。
6　Gómez Asencio (2006:18-19) に引用。清水（1987:75)。
7　原文は割愛する。Gómez Asencio (2006:29) 参照。 文中の「あの私の理論」が『ラテン文法』を指している。
8　『羅西辞典』の序文に，‘in eradicanda enx nostris homnibus barbaria’「我々の国の人々から野蛮さを排除すべく」とある[清水 1987:73]。また Menéndez Pidal (2005:837): ‘desarraigar de España la barbarie del mal latín’ も参照。

次に，ルネサンスのもうひとつの側面について見ていく。

1.1.2. 自然賛美と俗語の復権

ルネサンス期には，人間そのものや自然を賛美する，ありのままであることに美を見出そうとする自然崇拝の思潮があったが，これが人間の生来の言語，つまり俗語に対する意識を高め，その尊厳を認め擁護すべきという雰囲気を生み出すことになった[9]。これもイタリアで16世紀に活発に議論された，いわゆる「言語問題」が後にスペインに波及することになる。まず，イタリアでは Dante, Petrarca, Boccaccio というトレチェントの3大作家がラテン語ではなく俗語で作品を書き，これによってトスカナ語は文学言語としてラテン語に劣らぬ地位を確立し始めたが，当時，14世紀から15世紀初頭は，まだ俗語の評価は低く，「これらの作家たちは高貴なラテン語で書くべきであった」という否定的な考えの方が優勢であった[パトータ他2008:91]。Dante はこのような風潮の中で，俗語を称揚し，文学における俗語の使用と文体について論じた *De vulgari eloquentia*『俗語詩論』(c.1303) を執筆している。この中で Dante は，人為的に習得する古典語と，「乳母のまねをしつつ，なんの規則もなしに学びとる」俗語とを比べて，その後者の方を自然であることを理由に，より高貴なものとみなしている[10]。

1.1.2.1. Leon Battista Alberti

その後，1400年代になると，Leon Battista Alberti が俗語の議論に参加している。彼は，Leonardo Bruni と Biondo Flavio の間でなされた，ローマ時代のラテン語の状況，あるいは俗語の起源をめぐる論争に，*I libri della famiglia*『家族論』(1435 o 1437) という著書を持って参戦したのである。この第3巻の序文の中で Alberti は，ラテン語の分裂はゲルマン民族の侵攻に原因があるとし，この「堕落」したラテン語からイタリアの俗語が生まれたという見解を示している。そして，俗語がラテン語と同様に，学問や芸術の分野での使用に耐えうる言語であり，文法の規則性についてもラテン語に劣るものではないとし，俗語の地位を高めようとした[Patota 1996:xxii-xxiii，ヴァッレ他2008:103]。Alberti はさらに，1435年頃に史上最初のトスカナ語の文法書 *Regole della volgar lingua fiorentina* を著しているが，これは，「規則も規制もなく思うままに口から出る言葉（俗語）は，一貫した法則＝文法に則って語られる言葉（ラテン語）に劣る」，つまり「文法の有無が言語の価値を決める」[大黒 2010:272-273] ということを彼が強く意識したからであった[11]。

---

9 カストロ（2003:297）は，「ルネサンスは話し言葉，よく使う民衆的な言語というものを，精神の源たる人間的なるものの神秘的源泉と結びついている，最も直接的な表現手段として評価することになる」と述べている。

10 ダンテ（1984:5）。青木（1999:170）。

11 なお，この文法は Nebrija の『カスティーリャ語文法』(1492) よりも前に出版されたことになるが，ヴァッレ他（2008:103）は，「たとえ短い作品であっても，この本が思想史においてもつ意味は非常に大きい。一四三五年に執筆されているということは，＜近代ヨーロッパ最初の文法書＞と呼ばれる権利を有しているといえるだろう」と述べているのに対し，Padley (1985:157) は「現在では，これが人文主義者によるイタリア語初の文法書であるばかりでなく，ヨーロッパの俗語について最初のものとして知られている」としながらも，この文法が近代まで出版されなかっ

1.1.2.2. Lorenzo Di Medici

Lorenzo Di Medici はボッティチェッリやミケランジェロのような画家だけではなく，文学者をも庇護して俗語文学の発展に貢献したのみならず，自身も俗語で詞を書く詩人であった。彼の言語観は，糟谷（1985:19-20）に従えば，ギリシア・ローマの優れた古典作家はそれぞれの母語で執筆したのであり，自分たちも母語である俗語で書けばよいというものであった。

1.1.2.3. Pietro Bembo

Bembo は，俗語の使用を推めはしたが，自然主義の立場からというよりは，むしろ非常に高い規範意識から,俗語をラテン語やギリシア語と同等の高みへと押し上げようと努め，*Prose della vulgar lingua*『俗語論』（1525）を執筆した。彼が目指したのは，1300年代の3大作家を模範として，フィレンツェ語の文語を定めることで,「書き言葉は民衆の言葉に接近してはならない」[12] とか「過去の文体で書かねばならない」[13] などと述べているように，自然主義とは対極とも言える懐古主義的な立場を鮮明にしている。それにもかかわらずここに彼の名を挙げたのは，次の文言がいずれスペインにおける自然主義的俗語擁護論の中に頻繁に利用されているのを見ることができるからである：

> 「われらにとって良き時代だったあの頃，ローマ人にとってラテン語はギリシア語よりもより近しいものだった。それは彼らすべてがラテン語の中で生まれ，まさに乳母の乳とともにそれを飲んで学び，大概その言葉の中で全生涯を送ったからである」[14]

いずれにせよ,以上のような自然の言葉である俗語の権威を高めようとする言語思潮は，スペインではやや遅れて16世紀に本格化している。特に Juan de Valdés を皮切りに，多くの作家や文法家などがこの風潮に乗り，いわば死んだ言語であるラテン語に対し，生きた言語として自らの母語を褒め讃えるようになった。

1.1.2.4. Juan de Valdés

Valdés は *Diálogo de la lengua*『言語問答』（1535）において，その著作中の4人の対話者の1人である Marcio に「すべての人間は，自分の生来の言語，母親の乳房から吸った言語を磨き豊かにする義務がある」と述べさせている[15]。これは，先に見た Bembo の使った表

たことや，その記述の内容が Nebrija (1492) を凌ぐようなものではないことを指摘して，俗語の文法化という分野での Nebrija (1492) の先駆性はこれによって否定されるものではないと考えている。

12 Migliorini (1969:472).

13 糟谷（1985:23）。

14 『俗語論』は 1568 年版を参照した。引用はカストロ (2003:298), Bembo (1568:7).

15 ‘todos los hombres somos más obligados a ilustrar y enriquecer la lengua que nos es natural’. *Diálogo*, Lope Blanch (ed.) (1969:44).

現と類似しており，Menéndez Pidal (1968:68) (2005:839) や Lapesa (1960:14) は，Valdés が Marcio を Bembo に擬して，その思想を代弁させていると指摘している。

1.1.2.5. Miguel de Cervantes

「母乳とともに吸いとった言葉」という比喩表現は，Valdés によって Bembo から受け継がれ，それ以後も，自然主義的立場から俗語称揚を行う者が常套句的に用いる文句になった。例えば，Valdés の言語論に強い影響を受けているとされる Fray Luis de León もその一人であり，Cervantes もまた同種の俗語擁護を行っている：

> 「長ったらしいカスティーリャ語の言い回しを，古代語の簡潔な表現にとって代えたいと願っている狭い了見の者たちが，カスティーリャ語でも優しく甘美でありながら荘重かつ雄弁に思いのまま語ることができるような，広々と開かれた豊かな分野があるのだということを認識し，見習っていけるような道を拓くこと」[16]

> 「ホメロスは，ラテン語で詩を書かなかったが，それは彼がギリシア人だったからで，ウェルギリウスはギリシア語で書かなかったが，それは彼がローマ人だったからである。古代の詩人たちはみな，母親の乳房から吸いとった言葉で詩を書いたのであって，自分の思想の高さを表すのに外国語を持ち出したりはしなかったのである」[17]

1つ目は1585年の *La Galatea*『ガラテア』の序文で，俗語の豊かな表現力と自立性について述べたもので，2つ目は *El Quijote*『キホーテ』(続編) (1605) の中で，自然主義的な考え方を示したものであるが，これらはやはり先行する Bembo や Valdés の主張を想起させる。Cervantes は，22歳のとき（1569年）にイタリアに渡って以来，何度か同地に滞在しているが，その間にウェルギリウスやホラティウスといった古典作家，さらに当時のイタリア作家に親しみ，その中には，Bembo や後に見る『宮廷人』の著者 Castiglione があったとされる[18]。そのことからも，Cervantes が言語の問題に関して，イタリアルネサンスの自然主義に大きな影響を受けているであろうことが察せられるのである。

1.1.2.6. Cristóbal de Villalón

1558年に *Gramática Castellana*『カスティーリャ語文法』を著した Villalón も，その文法書と *Scholástico*『スコラ哲学者』(c.1538) という著作の中で，俗語の使用を擁護している。彼は，古典語との比較において俗語もそれらと同じように研磨されるべきと述べるにとど

16　セルバンテス（1999:9），カストロ（2003:305）。
17　カストロ（2003:297-298）およびセルバンテス（1998:230）を参照。
18　会田（1979:505）　参照。

まらず，他の諸国でも自国の言語について注意が払われていることを引き合いに出し[19]，スペインでは言語の扱いがおろそかになっていることに危機感を持っていたようである：

> 「このカスティーリャを自身の生来の言語でもって育ててきた賢明な知識人たちが，これまでカスティーリャ語に与えられてきた侮辱に甘んじて，この言語の名誉を回復しようと努めてこなかったことに私は大変驚いている。」[20]

Villalón の主張は，単に自然主義的な立場から古典語に比肩しうる価値を俗語に認めようというのではなく，次に述べる国家主義的な意識が反映してのことであると思われるが，このような他国語の状況に鑑みた主張は他にも散見される。

1.1.2.7. Ambrosio de Morales

例えば，歴史家であり建築家でもあった Morales は，*Discurso sobre la lengua castellana*『カスティーリャ語についての談話』(1546) の中で，イタリアの言語問題を引き合いに出して次のように述べている：

> 「私にとっては，この点について我々スペイン人が不注意であり，自分の言語を評価せず，また敬意を払ったり，立派にしようとしなかったことが悔やまれてなりません。これまでこの言語は軽蔑と非難をもって扱われてきたのです。」[21]

これらは，時期的には Villalón の文法書よりも先に出ており，それに何らかの影響を与えているかもしれない。

以上の他にも自然主義的な主張を挙げることができるが，先人の書いたものに従っただけの独自性を欠くようなものが散見される。しかし，この自然言語崇拝からは，母語をより豊かにし，研ぎ澄まさねばならないという考え方が派生することになる。それは，後述する Nebrija の『カスティーリャ語文法』(1492) の序文に最初の兆候を見出すことができるだろう。

1.2. 言語的国家主義

まず，この時代に増長しつつあった国家意識が言語論に及ぼした影響，すなわち言語帝国主義というものを考えたい。Menéndez Pidal (2005:838) は，言語思想の流れについて，「中世のラテン語万能主義のあとに，近代の言語的国家主義が続いた」としており，この近代の言語的国家主義とは，それまで唯一の文化言語であったラテン語に代わって，個々の民族の言語があらゆる場面で用いられることを可能にしようとする動きであったとして

19　Villalón (1558:8-9) およびカストロ (2003:299), ラペサ（2004:316) 参照。
20　原文は Villalón (1558:6).
21　García Dini (ed.) (2007:216) より。また García Dini (ed.) (2007:218), Menéndez Pidal (2005:845) も参照。

いる。

1.2.1. Lorenzo Valla

Valla についてはすでにそのラテン語についての思想を見たが，さらに言語を国家と関係づけた彼の主張は次のように要約される：

> 「中世風の，蛮族の下卑た表現やシンタックスに侵されていない純正のラテン語のある所―とりわけ教皇庁の人文主義者たち―にこそ「ローマ帝国」が生きていると想像し，ゆえにフランスもスペインもドイツも，イタリアの傘下に服すべきだとしたヴァッラの『言語帝国主義』」[22]

> 「ラテン語はイタリア人にとってローマ帝国と一体化していた。だから新生ローマ，そして新生イタリアは，言語つまりラテン語を復興させるべきなのであり，それあってこそイタリアの文化や言語に堅牢な基礎が据えられるはずであった」[23]

このように Valla は，ラテン語をローマ帝国と一体化させている。つまり，国家の繁栄と言語の栄華とを重ね合わせて，この 2 つを同一視しようとしたのである。

1.2.2. Antonio de Nebrija

そしてこの Valla の手法は，やはり Nebrija が踏襲している。Nebrija は『カスティーリャ語文法』の序文で「言語は帝国の朋友であること，またかくの如く朋友であったが故に，二者同時に勃り，成長し，繁栄し，また二者の没落も時を同じくした」[24] と述べている。

言語帝国主義の典型ともいうべきこの一節はあまりに有名だが，15世紀末のスペインは，レコンキスタが完遂に向かい，国家の威信が高まっていた時期で，Nebrija はまさにそのような背景の中で文法を著したことになり，女王イサベルに捧げられたその序文の内容が多分に政治的であるのも，半ば必然的であるといえる。このような考えは，Nebrija 独自の発想ではなく，異論はあるものの，一般的には Valla の「ローマの言葉が支配する所にローマ帝国あり」[25] という『ラテン語の典雅』の一節に由来すると考えられている。さらに言えば，この「言語は帝国の伴侶」という思想をカスティーリャ語に適用したのも，Nebrija が最初ではない。Nebrija 同様，Valla の影響を受けた García de Santa María が，1481-91年とされるその著作 *Las vidas de los santos religiosos* の中で，すでに「言語というものは普通，他の何物にも増して，帝国につき従うものである」と述べているのである[26]。

---

22 池上(2008:11-12)。
23 池上（2008:24）。
24 Nebrija (1492:1), ネブリハ（1996:4）。
25 清水 (1987:78-79) より引用。原文は, 'ibi nunquam Romanum imperium fuit, ubicumque Romana lingua dominatur'.
26 Asencio (1960:403-404).

いずれにせよ，Nebrija (1492) の帝国主義的な言語観は，ルネサンス期に促進されることになる。それは，前世紀にレコンキスタを完遂し，内的な領土拡大を終えたあと，スペインはイベリア半島の外に向かって発展を続けたからで,カルロス5世がハプスブルク帝国の皇帝となってヨーロッパの覇権を握り,その息子のフェリペ2世が新大陸やフィリピンにまで領土を拡大したことや，レパントの海戦における勝利などが，スペインの国家としての威厳を高めたのである。このような政治的威信の拡大は，帝国の言語であるスペイン語もそれに見合う権威と風格を備えているべきであるという，既存の思想を一層先鋭化することになり，スペインの言語帝国主義は16世紀に非常な高まりを見せた。このような思想については，Menéndez Pidal (2005) や Alonso (3ed.)(1958) が多くの例を挙げているが，以下にそのいくつかを見ておく。

1.2.3. Francisco de Medina

詩人 Francisco de Medina は，Fernando de Herrera による Garcilaso の注解 (1580) の序文において次のように述べている：

> 「私はいつも，我々の怠慢と無頓着さに驚愕するばかりだ。[我々スペイン人は]並はずれた強さとほとんど神業ともいえる思慮深さでもって，並みいる列強の高慢を手なずけ，スペイン王国の威光を，かつて人類の軍隊が一度も到達したことのない高みへと押し上げた。そしてこのような幸運のほかに，我々は，固有の意味を持ち，語彙が豊富で発音が甘美であり，好きなように表現できる柔軟性を備えた，そういう言語を幸運にも持ち合わせているというのに，そのような貴重な宝物を失うがままにしようというほど―あえて言おう―我々はそれほどまでに不注意で（あるいは無知で）あるというのか。」[27]

> 「そして優れた才人たちがこの栄光の競争へとかき立てられるだろう。スペイン語の威信が新しく称賛すべき豪華さを備えて広がっていくのを我々は目にするだろう。我々の軍隊の旗が堂々と入りこんでいる最果ての土地にまで。」[28]

Medina は，世界史上に類を見ない帝国の発展とその言語であるスペイン語の威信とを結び付けているが，Valla の思想において，ラテン語の偉大さは広大なローマ帝国の版図に重ねられていた。Medina はこの思想と相通じるが，Valla と違うのは，言語の威信の拡大が今まさに進行中であり，さらには未来において進展していくことを予期，期待している点である。

27　原文は割愛。García Dini (ed.) (2007:196) および Alonso (3ed.)(1958:29), Menéndez Pidal (2005:938) 参照。
28　García Dini (ed.) (2007:203) および Menéndez Pidal (2005:938) 参照。

1.2.4. Fray Pedro Malón de Chaide

Malón de Chaide は，この Medina の考えをわがものとして発展させ，「スペイン語が，世界中のいかなる言語にもひけをとらず，完全なものとなるのを目の当たりにする」あるいは，「スペイン語はスペインの国旗と同じように広まり，この 2 つは世界の端から端まで行きわたっている」などと述べている[29]。

以上のように，16世紀には，スペインの国家的繁栄とスペイン語の威信の高まりが並行的に論じられることが頻繁であった。

そして，これはスペインにのみ起こったことではなく，他のヨーロッパ諸国でも同様であり，スペインの場合と類似した国粋主義的な俗語賛美が各国でなされた。具体的には，ポルトガルでは Fernão de Olivieira や João de Barros が，イタリアでは Sperone Speroni が，フランスでは Joachim Du Bellay が，それぞれ自国語の称揚を行っている[30]。この自国語の賛美は，ラテン語に対する俗語の優位という意味においてのみならず，他言語との比較において自らの優位を説くという側面もあった。例えば，ポルトガルの Barros は，「スペイン人はめそめそ泣き，イタリア人はワーワーとうるさくフランス人は歌うようだ」[31]という諺を引用して，スペイン語に対するポルトガル語の優越を唱えており，フランスの Henri Estienne はイタリア語を非難し，スペイン語に対してはさらに激しい侮辱を加えている[32]。Estienne はフランス語をギリシア語に次ぐ優位言語として擁護し，宮廷に広まっていたイタリア語やスペイン語の借用語に対抗してフランス語の純正さを保つことを目指した。一方，Du Bellay の国語称揚論は，イタリアの Speroni を逐語的にコピーする部分もあり[33]，イタリア語やスペイン語を敵視しているわけではない。また，他国語との比較における優劣を論じたものとしては，スペイン領であったリューベンで 1555 年に出されたスペイン文法[34]も挙げられるが，この著者はスペイン語のフランス語に対する優位性を説いた。先の Estienne は，これに対抗する意図で書かれたとも言われている[Yllera1998b:356]。また Herrera も，Garcilaso の作品集に付した解説で，他の俗語，特にイタリア語との比較においてスペイン語をより優れた言語であると述べている[35]。この背景には当時流行していたイタリア語の借用に対する抵抗感があるものと思われる。

帝国主義的言語観，国語の称揚については以上の通りだが，Kukenheim (1932:203) は，16世紀の俗語文法出現の背景を要約して次のように述べている：

---

29 *La conversión de la Magdalena* (1588) の序文で述べている。Alonso (3ed.)(1958:29) より引用。Menéndez Pidal (2005:939) は，これをイタリアとフランスが知的活動を旺盛に行っていたことに対する競合意識の表れであるとしている。

30 それぞれ，*Gramática da linguagem portuguesa*, 1536; *Dialogo en louvor da nossa linguagem*, 1540; *Dialogo delle lingue*, 1542; *Deffense et Ilustration de la langue française*, 1549. バーク（2009:81-89）に詳しい。

31 バーク（2009:88）。

32 *Conformité du language françois avec le grec*, 1565. Yllera (1998a:393).

33 Romera-Navarro (1929:243), Yllera (1998b:354).

34 本稿 3.1.1.を参照。

35 *Obras de Garci Lasso de la Vega*, 1580. Menéndez Pidal (2005:938) を参照。García Dini (ed.)(2007:205-207) にさらに詳しい。

「16 世紀の諸文法は，帝国主義的感情によって鼓舞されたものである。つまり，ルネサンス期の君主たちが,自国の言語を美化しようという努力を後押ししたのは，知的好奇心のみによるものではなかったのである」。

1.3. まとめ

この時期の俗語をめぐる現象としては，まず個人の生来の言語を最も賛美すべき対象とするルネサンスに特有の自然主義の立場が俗語の権威向上を促し，これに国家意識の高揚あるいは帝国主義的感情というものが重なって，国家を文化的に象徴する言語の称揚を強力に推し進めることになったと言うことができる。俗語の権威向上は，この 2 つの相乗効果によって，加速度的に進むことになったのである。

2. 俗語の規範選択

前節で見たように，ラテン語に対して攻勢に出た俗語は，次に，他の俗語との競合を経験することになる。これについては，俗語の規範の選択という問題を，イタリアとスペインのケースを対照させて考えたい。

まず，イタリアの言語問題における俗語の規範をめぐる論争を見ていく。先に見たように，14世紀にイタリアでは例の3大作家が俗語で文学作品を書き，15世紀には依然唯一の文化的言語とみなされていたラテン語に対して，俗語はその地位の保全が成され始めた。当時は，イタリアという統一国家は存在せず，イタリア半島は小国が分立する群雄割拠の状態で，これらの諸国は政治的にも文化的にも競合関係にあったが，これが「言語問題」の根底にあったと思われる。つまり，イタリアという国家は存在せずとも意識としてイタリアという一つの共同体の概念は常にあったので，そのイタリアの全域で通用する共通語，模範となるべき言語が，どこの俗語なのかという問題が生じたのである。また，範となるべきは文語か口語か，あるいは宮廷の由緒正しい言語か民衆のことばか，というようなことが論争のポイントになり，特に16世紀に活発な議論が繰り広げられることになった。

以下では，諸派の主張と論争の概略を見ていく。

2.1. イタリアの言語問題

イタリアの言語問題における各論の論点の軸としては，大まかに，①宮廷語（折衷語）派，②文語派，懐古主義，③口語派，④反フィレンツェ語諸派に分けられる。

2.1.1. Il Calmeta (Vincenzo Colli)

まず, 宮廷で用いられる言語, 言葉づかいを範とすべきとする宮廷語論は, Vincenzo Colli（通称 Il Calmeta）が最初に唱えたとされるが，その著書 *Nove libri della volgar poesia*『俗語詩についての 9 巻』は消失し，彼の言語論の全貌を直接的に観察することは不可能である。しかし，後に Bembo が *Prose della volgar lingua*『俗語論』(1525) においてこれに言及

していることなど[36]から，間接的にその概要を知ることができる。Migliorini (1969:474) にしたがえば，Calmeta は，詩を書こうとする者のために，「イタリアの諸言語のどれより」フィレンツェ語で書くことを推奨し，Petrarca と Boccaccio を研究すべきであると説いている。そして，そのように獲得された言語を研ぎ澄まし豊かにするためには，ローマの宮廷すなわち教皇庁のモデルに従うことが肝要であると考えた。Calmeta のいう宮廷語とは，イタリアの諸俗語のみならずフランス語やスペイン語などの外国語からも洗練された語彙や表現を採り入れた，偏りのない混成語であったのである[37]。

2.1.2. Gian Giorgio Trissino

このような考えは，Trissino がさらに発展させている。彼は，16世紀イタリアの言語問題の火付け役とされる著書 *Epistola de le lettere nuovamente aggiunte ne la lingua italiana*『イタリア語に補充される新しい文字についての書簡』(1524) の中で独自の正書法を提案しているが，この正書法が「イタリアで間違いなく最も美しいトスカナ語と宮廷語の発音に従う」ものであると述べている。また，表題の 'lingua italiana' とは，Trissino にとってはトスカナ語やフィレンツェ語，ロンバルディア語などを含んだ集合体を表す名称，すなわちイタリアの俗語の総称であり，トスカナ語がその基本であったことを認めている[38]。さらに，Dante や Petrarca の文学言語については，シチリア語[39]やロンバルディア語[40]などの要素が含まれていること，またイタリア文学の起源はシチリアとボローニャにあることから厳密にはトスカナ語あるいはフィレンツェ語とはいえず[41]，この俗語を「イタリア語」と呼ぶことを正当化している。したがって，Trissino にとってのイタリア語とは，「イタリア全土の文学者教養人のあいだでひとしく共通の意味で理解，使用される混交文化語」[糟谷 1985:26]，つまり 'lingua comune' 共通語のことであったと言える。

2.1.3. Baldassare Castiglione

Castiglione は，宮廷人が身につけているべき知識や教養について論じた著作 *Il Corteggiano*『宮廷人の書』(1528) において，宮廷語論を展開した[42]。彼は，後述するが，14世紀の文学フィレンツェ語に絶対的優位を認める Bembo のような復古的なフィレンツェ主義を批判し，文語と口語の間に差異があるべきではないとした[43]。そして，「すぐれた表現の力と正しい用い方は，慣用によるのがいちばんであり，常用されないことばを用いる

36 Migliorini (1969:474) 参照。
37 Lotti (2000:72), Bembo (1548:13) を参照。
38 中川 (1992:226) 参照。
39 「シチリア派が用いたその他の語，殆ど全ての言い回し，組み立てがみうけられる」[中川 1992:227].
40 「むしろ，ペトラルカはフィレンツェよりもロンバルディーアの方でよりよく理解されているのだと言いたい」[中川 1992:227]。
41 Lotti (2000:74) にこれに関する Trissino の弁が引用されている。
42 言語がテーマとして扱われるのは，「ミケル・ディ・シルヴァへの献辞」と，「第 1 の書」の第 28 章から第 39 章においてである。
43 カスティリオーネ(1987:101)。

のは，つねに誤りである（…）だからボッカッチョの使った多くの語を用いるのは不適当」[44] であるとし，慣用こそが言語の使用の範となるべきで，古いトスカナ語の使用，Petrarca と Boccacio の模倣は退けられるべきとの考えを示している[45]。

彼にとっての宮廷語，つまり模範的俗語とは，ギリシアの作家たちが「慣用していた四つの言語の各々から，好きなようにことばや文形や慣用句を選びとり，共通語といわれるもう一つの言語を生み出した」[46] ように，「イタリアの諸地方から美しい上品なことばを選んで用い」[47] られるものであるべきで，慣用のみが言語の規準となりえることを繰り返し説いている[48]。そして，慣用が許すならば，「フランス語やスペイン語のことばを，多少用いることも奨励しておきたい」とさえ述べており[49]，この点では Castiglione の主張は先の Il Calmeta と Trissino の折衷論と相通じるものがあると言える。イタリアの言語問題における主張をあえて分類するならば，以上の 3 者を宮廷語論者あるいは折衷語論者として同一のグループにまとめられるだろう。

2.1.4. Pietro Bembo

Bembo は詩人であり，最後は枢機卿にまでなった人文主義者だが，16世紀の言語問題の3大潮流の一つを構成するのがこの Bembo によって代表される懐古主義的立場で，1300年代トスカナ文学[50]を唯一の俗語のモデルとみなすものであった。Bembo は，3人[51] による会話という形式を採る『俗語読本』(1525)において，まずラテン語と俗語の性質について論じているが，ラテン語の普遍性と比して統一性を欠き，あまりに多様である諸俗語の中で，どの言語を規範とするかということに論点は集中する[52]。その中で Calmeta の宮廷語論について言及がなされているが，Bembo は，作中の会話者の一人である Giuliano de’ Medici に宮廷語は言語とは言えないという考えを代弁させている：

> 「このことばは，全く言語とはいえない。というのも，作家を持たぬことばを真に言語であるとはいえないからである」[53]

このように，折衷言語である Calmeta の宮廷語を退け，「言語は輝かしく尊ぶべき作家を

44　カスティリオーネ(1987:9)。
45　カスティリオーネ (1987:103)。また，古典や先人の模倣の批判は，随所に見られる。「もしウェルギリウスがヘシオドスを一から十まで模倣したとしたら，かれより優れた詩人にはならなかったでしょう」[カスティリオーネ 1987:101]など。
46　カスティリオーネ (1987:121)。
47　カスティリオーネ (1987:119)。
48　‘la consuetudine sia la maestra’「慣用こそ教師である」[カスティリオーネ 1987:125] など。
49　カスティリオーネ (1987:119)。
50　Dante については，『神曲』における言語がラテン語や外国語なども含むものであるとして，批判している。ラテン語のように俗語を安定させたいという立場から，「『神曲』のような多種多様な言語が入り乱れる作品はベンボにとって許容し難かったよう」[中川 19 92:128]である。
51　プロヴァンス語を称賛する Federico Fregoso, フィレンツェ主義の Giuliano de’ Medici, Bembo の弟で彼の意見を代弁する Carlo Bembo の 3 人。Tesi (2001:208) 参照。
52　糟谷（1985:22）。
53　Bembo (1568:31).

もてばもつほど，美しくすぐれたものになるのだから，フィレンツェ語が(...)わたしの俗語のみならず，われわれが知っている他のあらゆる俗語より，はるかに卓越していると断言できる」[54]と述べて，俗語の規範としてふさわしいのは，他のどの言語よりもフィレンツェ語[55]であると主張する。

しかしそれは，Boccaccio と Petrarca に支えられた14世紀の文学言語であり，Bembo の同時代のフィレンツェ語ではなかった。彼はまた，先に見たように，「書き言葉は民衆の言葉に接近してはならず」，そうでなければ「風格や偉大さ」を失ってしまうと考え[56]，言語のモデルとして，民衆の慣用ではなく，あくまで過去の優れた作家たちの文体を採用することを主張した。さらに，「現在生きている者が口にし書いていることばよりも，過去のひとびとの作品のことばのほうが，よりすぐれ，より賞賛に値する」[57] あるいは，「われわれにしても過去の文体で書かねばならない」[58]などと述べるなど，口語的用法を拒絶するだけでなく，同時代（15世紀後半）の文学言語をも退ける[59]，排他的なアルカイズムの立場をとった。そしてその極めて保守的な態度は，後の1582-3年創設の Accademia della Crusca へ踏襲されていくことになる。

2.1.5. Niccolo Machiavelli

先述の Trissino の *Epistola* は，問題の俗語を「イタリア語」と呼んだために，主にトスカナの文人たちの敵意を買うこととなり，Lodovico Martelli, Claudio Tolomei, Nicolò Liburnio などのトスカナ語擁護論者たちは，こぞって Trissino の正書法を批判し，俗語の名称について議論した。Machiavelli は，Trissino の言語論に反対するこれらの知識人たちの急先鋒で，「フィレンツェ語」の名称の妥当性を唱え，*Discorso o dialogo intorno alla nostra lingua*『われわれの言語についての叙説と対話』（1514）を著したが[60]，これは，Trissino が1514年に行った講演で *De Vulgari Eloquentia*『俗語詩論』 を Dante の著作としたことに異を唱えるものであった。彼は，『俗語詩論』を Dante に帰することを認めず[61]，また『神曲』を分析して，これが紛れもないフィレンツェ語で書かれたものであると主張し[62]，Trissino の「イタリア語説」（折衷言語であるイタリアの共通語）を否定したのである。彼は，Trissino のいう「イタリア語」の基礎はフィレンツェ語にあり，その固有の語彙や語法が広まって，イタリア全土に共通のものになったとし[63]，また Calmeta に代表されるような「宮廷語」

54 糟谷 (1985:22), Bembo (1568:36)。
55 Bembo は，俗語の名称として「フィレンツェ語」と「トスカナ語」，あるいは単純に「俗語」という言い方を同義で用いている。
56 Migliorini (1969:472) 参照。
57 糟谷 (1985:23)，Bembo (1568:42)。
58 糟谷 (1985:23)。
59 天野（1979:125）は，「ベンボは現代語の不備こそが俗語の混乱の，そして言語問題の根本原因であることを洞察しており，だからこそ文学語の模範を過去の名文に求めた」のだとしている。
60 Migliorini (1969:487) は 1514 年の秋を出版の時期とみているが，同年の Trissino の講演のあと即座に反論を行ったということになる。
61 Tesi (2001:203) 参照。
62 Lotti (2000:74) 参照。
63 糟谷（1985:29），天野（1979:122）参照。

の概念も，それがフィレンツェ語をベースとして成り立つものであるとして，これら2つの言語をフィレンツェ語と呼ぶより他はないと主張した[64]。一方，『神曲』におけるフィレンツェ語以外の語彙の存在を理由に Trissino がこの言語をフィレンツェ語と呼ぶことを認めないことに対し，Machiavelli は，「あらゆる言語はある程度の外国語の要素を持つもので，そのことを理由に言語の名称が左右されることは正当ではない」と反論した[65]。また，Machiavelli は，当時のフィレンツェにおける話し言葉の優位を唱え，俗語のモデルが14世紀の3大作家の文学言語に基づくことをよしとしなかった。彼は，フィレンツェ語が自然で生きた話し言葉であるとしてその優位を力説し，俗語による文学において，常にこの言語がモデルの役割を果たしてきたと主張する[66]。したがって，Machiavelli は，糟谷 (1985:29) にならって言えば，「＜話＞と切り離された文学語の純粋性だけを望むベンボと決定的に対立する」ということになる。

このように Machiavelli は，フィレンツェ語の他の俗語に対する優位と共通語としての有効性を説き，さらに文語ではない自然言語をモデルとすべきと考えた。

以上のように見ると，イタリアの言語問題は，口語―文語，折衷言語―単一言語，フィレンツェ語―非フィレンツェ語，あるいは名称としてフィレンツェ語―トスカナ語という風に，複数の対立項が重なって，立体的・多次元的な議論がなされていたと言えるだろう。

2.2. スペインの言語問題

上述の，イタリアにあった言語問題をスペインの中に見出そうとすると，「『言語問題』は，イスパニアではほとんど聞かれなかった」[バーク 2009:129]あるいは，「スペインでは言語問題は起こらなかった」[García 1971:xxviii]といった否定的見解にぶつかってしまう。

しかし，すでに見ている通り，Nebrija やその他の人文主義者たちは，中世の野蛮で粗悪なラテン語を一掃し，ラテン語に対する無知や乱れた使用を矯正することを目指して行動を起こしていた。この点では，言語問題の一つの側面であるラテン語対俗語の問題がスペインでも確かに議論されており，そのことを否定することはできない。ここで挙げている見解は，言語問題のもう一つの論点，すなわち俗語間の競合と，俗語の名称の問題について，スペインにおけるその存在を否定するものである[67]。

以下，それらの否定説の妥当性を検証してみよう。

2.2.1. トレド語[68]

スペインではすでに13世紀，アルフォンソ10世の治世において，公的文書を俗語で書く

64　Tesi (2001:204) による引用。
65　Lotti (2000:74). Migliorini (1969:487) に引用がある。また Tesi (2001:203-204) を参照。
66　Tesi (2001:203).
67　García (1971:xxviii):「スペインの文法家たちの間で，カスティーリャ方言の他の諸方言に対する優位性を説くようなものはなく，また宮廷でのことば遣いを言語のモデルとして正当化する必要も感じられなかった」
68　本稿では，この時代の言語のバリエーションについて，「～語」と「～方言」とを区別せず同義的に用いる。

ことが定められており，カスティーリャ語は対外的，政治的にも公的な言語としての地位を徐々に確立しつつあった。カスティーリャ王国の都であったトレドは，西ゴート時代から王国の首都として栄え，アルフォンソ10世の時代には翻訳その他の研究施設が存在した文化の拠点であった。Abad (2008:205) によれば，フェルナンド3世の治世末期には，カスティーリャ語は政治の場面で日常的に用いられる言語であり，その息子アルフォンソ10世はどのような場面においてもカスティーリャ語を使用したとされる。さらにアルフォンソ10世は，トレド方言がカスティーリャ語の基準であると宣言したとされているが[69]，ラペサ（2004:247) は「それに歴史的根拠があるとは思えない」と否定している。しかしラペサ（2004:247) は，「トレドのことばは，ブルゴス Burgos やブレバ la Bureba のことばにみられるような偏狭性をもたなかったので，王国の言語上の均一化のための範例として役立った」と述べ，トレドのことばがすでに模範として機能していたことを認めている。

2.2.1.1. Juan de Valdés

このようなトレド語の他の俗語に対する優位性を説く主張は，Juan de Valdés[70]の *Diálogo de la lengua*『言語問答』(1535) の中に，その端緒を見出すことができる。Valdés は，トレドの宮廷にいたことを自らの言語に関する権威の裏付けとして[71]，アンダルシア出身である Nebrija の言語使用を，純正でないとして繰り返し激しく批判している：

> 「君には分からないか。ネブリハは，ラテン語に非常に通暁していたことは，誰にも動かしがたいことではあるけれども，それでも結局は彼がアンダルシア人であってカスティーリャ人ではないこと，そしてあの語彙集は，ひやかしのために書いたのではないかと思わせるほど，ほとんど注意を払わずに書いたということは，否定することはできない」[72]

このようにトレド方言は，16世紀を通して規範とみなされ[73]，その言語モデルとしての優位性は，スペインの内外で主張されたが，フェリペ2世によるマドリッド遷都（1561）を経て，トレドが政治的重要性だけでなく文化的地位をも失いつつあった17世紀に入ってもまだ広く聞かれた。以下にいくつかその例を挙げる。

2.2.1.2. Melchor de Santa Cruz

Melchor de Santa Cruz という作家は1574年の著作の中で，アルフォンソ10世が制定したとされる法律について言及している[74]：

69 Ramajo Caño (1993:333) は，1253 年にアルフォンソ 10 世が宣言したとする。
70 Menéndez Pidal (5ed.) (1968:68).
71 ‘hombre criado en el reino de Toledo y en la corte de España’「トレド王国とスペインの宮廷で育った者」, *Diálogo*, Lope Blanch (ed.) (1969:62).
72 *Diálogo*, Lope Blanch (ed.) (1969:46).
73 Lope Blanch (1969:14).
74 *Floresta Española de apotegmas o sentencias sabia y graciosamente dichas.* Menéndez Pidal (2005:92)

「共通語に関するあらゆることにおいてその[トレドの]権威は非常に大きく，カスティーリャ語のある語について疑いが生じたら，そこにいるトレド人がその語を特定すべしという，王国の法律があるほどである」[75]

これについては後に Lope de Vega も1630年の作品中で言及している[76]。また，この Santa Cruz はトレド語優位の根拠として，①トレドがスペインの中心に位置すること，②海から遠く，外国との接触を免れていること，③住人が才知に富むこと，王城の地であったこと，という3点を挙げており[77]，単に政治的，文化的首都であるということにとどまらず，地理的条件をもトレドの利点としている。

2.2.1.3. Jiménez Patón

文法家の Patón は *Elocuencia española en arte* (1604) の序文において，言語の名称には ‘castellano’ ではなく‘español’ を用いながらも，トレドを最も良いスペイン語が話される場所であるとしている[78]。

2.2.1.4. Miguel de Cervantes

Cervantes も「ことばづかいの問題に大きな関心を寄せた作家のひとり」とラペサ (2004:353) が言うように，この問題について『キホーテ』の中で自論をのぞかせている[79]：

「なんせわしゃ，都に育ったわけでもなきゃ，サラマンカで勉強したわけでもねえだから，わしの使う言葉によけいなものをくっつけたかはぶいたか，知るはずがねえってこたあ，お前さまもご存じでさ……サヤーゴ生まれの男にトレード生まれみてえにしゃべろと強いたところでどうしようもねえだし，トレードの人間だって，正しい言葉を使う段になったら，ちょっこらちょっとうまく言えねえ者もあるでがしょうよ」

「(…) 彼らはみなトレド人だ；そこのことばは純正で，適切で，上品かつ明晰だ (…)」[80]

また，Baltasar de Gracián もトレドを「良きことば遣いの学校」と称しており[81]，黄金世紀の作家たちはトレドのことばをモデルとして認めている。

参照。
75　原文は Alonso (3ed.) (1958:65) に引用。
76　*Laurel de Apolo* (1630). González Ollé (1988:861) より引用。
77　Alonso (3ed.) (1958:65-66), Menéndez Pidal (2005:927) 参照。
78　「トレド，そのことば遣いは，真のスペイン語を評定する権限を与えられ，そしてその文法は非常に技巧に富んだものである」と述べている。García Dini (ed.)(2007:284) 参照。
79　カストロ (2003:301) に引用。
80　Menéndez Pidal (2005:928) に引用。
81　*Criticón* (1651).‘Toledo ... escuela del bien hablar’. Menéndez Pidal (2005:929) より。

このようなことがトレド主義を勢いづかせ，トレド語の地位を確固たるものにしたと考えられよう。事実，17世紀にはスペインの外でもトレド語を称賛する声が聞かれた。1619年，パリでスペイン語の対話集 *Diálogos familiares* を出版した Juan de Luna は，トレドを「スペイン語が精緻であるところ」[82] と評している。

このように，スペインにおけるトレド語は，イタリアでのフィレンツェ語のような位置にあったということができ，宮廷の所在地であることに加え，フィレンツェ語同様，優れた文学作品を有していたことも言語の威厳を高める後押しになったと考えることができる。

2.2.2. カスティーリャ語

次に，カスティーリャ語という名称あるいは概念についてである。Francisco López de Villalobos は，1515 年の *Diálogo sobre las fiebres interpoladas* の中で，トレド語が規範とみなされていることに反発している。彼は，トレド語はアラビア語の要素でもってカスティーリャ語を汚しており，また優れた文学に基づいていないなどと批判している[83]。

Villalobos は，トレドに限定されない広義の意味での ‘castellano’ カスティーリャ語という名称を，‘toledano’ トレド語に対抗するものとして支持したのである。これは，イタリアにおける ‘fiorentino’ と ‘toscano’ という俗語の名称の問題と本質的に同質のものであるといえるだろう[84]。

このような内部での方言間の覇権争いが局所的にはあったものの，カスティーリャ語の文学語としての地位は，16世紀には完全に不動のものとなり，カタルーニャやバレンシアでは，多くの詩人や作家がカスティーリャ語で書いている[85]。ラペサ（2004:312）はこのような事情について，「カスティリア語の隆盛は，それまでの何百年かにわたって豊かに華咲いたカタルニア文学の急激な衰退と重なり」，「カスティリア語による文学以外には，文学として残るものはほとんどなかった」としている。また，1576年には，バレンシアの公文書はもっぱらカスティーリャ語でのみ作成されるようになっている[86]。したがって，バレンシア人の Narciso Viñoles が，カスティーリャ語は「スペインに存在する多くの野蛮で粗野な言語の中にあって，ラテン語の響きがするこのうえなく優雅な言語という呼び名に十分価する」と評するのも当時の状況を反映するものであったと言えよう[87]。

トレドを規範とするか否かの議論があったにせよ，カスティーリャ語の優位性は圧倒的であったが，これに異を唱え，他の俗語を称賛する者，あるいは「カスティーリャ語」という呼称に抵抗感を持つ非カスティーリャ人もいた。

82 González Ollé (1988:863) に引用。
83 Ramajo Caño (1993:334) を参照。
84 Menéndez Pidal (2005:707-708) 参照。
85 バレンシアの文学上の重要性は，文化の中心であったトレド，マドリッド，セビーリャに次ぐ地位にあり，バルセロナに関しては，サラゴサやブルゴス，セゴビアよりも重要度が低かった [Menéndez Pidal 2005:700,705].
86 Moreno Fernández (2005:146) 参照。この公文書のカスティーリャ語一本化は，レオン，アラゴン，ナバラではこれより先にすでに起こっていた。
87 ラペサ（2004:292), Fernández Delgado (1966:36-37) 参照。

2.2.3. 反トレド語・反カスティーリャ語

ここでは，トレド主義あるいはカスティーリャ語の優位を危惧する，または明確に反対する主張を見てみよう。

2.2.3.1. Juan Martín Cordero

バレンシア出身の Martín Cordero は 1556 年，アントワープで正書法[88]を著しているが，その中でカスティーリャ語を称揚しつつも，ラテン語はラテン人にしか書けない，ギリシア語はギリシア人にしか書けないというのは説得力を欠く，ということを引き合いに出し，「カスティーリャ人でないからという理由で，その人は，カスティーリャ人よりもカスティーリャ語をよく書くことはできない，と考えてはならない」[89]と述べている。これが，カスティーリャ語がもはやカスティーリャだけの言語ではなく，スペイン全体の共通語であるという見識に基づくものであるなら，Menéndez Pidal (2005:930) がいうように，イタリアの言語問題において Trissino などが示した立場に通じるものであると考えられるだろう。しかし，Cordero は Trissino がイタリア語（自身が「イタリア語」と呼ぶ言語）の中に認めたように，カスティーリャ語に折衷語としての性質を認めていたかは定かでない。

2.2.3.2. Martín de Viciana

同じくバレンシアの Martín de Viciana も，やはりまずカスティーリャ語を賛美し，スペインの共通語として通用していることと，諸言語との混淆をカスティーリャ語優位の根拠としているが[90]，イタリアの言語問題に比して言うならば，先の Cordero よりもこの Viciana の方が，Trissino に類似していると思われる。そして Viciana は，カスティーリャ語を褒め讃える一方で，バレンシアではカスティーリャ語の流入によって人々が自らの母語であるバレンシア語を忘れ，カスティーリャ語を話すことに言及しているが[91]，これは，バレンシア語のカスティーリャ語や他の俗語に対する優位や，共通語としての資質を主張しているのではなく，単にバレンシア語の衰退を嘆く情緒的なものである。

2.2.3.3. Bernardino Gómez Miedes

アラゴン人である Gómez Miedes は，アラゴン人が粗野で堕落したカスティーリャ語を話すという，当時のアラゴン語に関する否定的な通念に対して，「アラゴン人はカスティーリャ語と同様にラテン語から直接派生したアラゴン語を話すのであり，それはラテン語の発音により近いとさえいえるものである」と反論する。しかしながら，彼もやはり上の2人のバレンシア人同様に，カスティーリャ語の明晰さ，正確さ，発音の優美さを認めない

88　*La manera de escrevir en castellano o para corregir los errores generales en que todos casi yerran*.
89　Menéndez Pidal (2005:930) およびカストロ (2003:305) 参照。
90　*Libro de las alabanzas de las lenguas hebrea, latina, castellana, y valenciana* (1574), García Dini (ed.) (2007:179-180) および Pastor (ed.) (1959:121-126) を参照。
91　García Dini (ed.) (2007:179).

わけにはいかなかった[92]。

このような，非カスティーリャ語のいわば消極的な顕揚とは一線を画す強い主張が，アンダルシアで見られた。当時，15世紀末のレコンキスタでアンダルシアの領域が拡大したことと，1503年に Casa de Contratación de las Indias『インディアス通商院』が設立されて以降の顕著な経済的繁栄によって，セビーリャの都市としての重要性は突出したものとなっていた。さらに，トレドとともに文学の拠点として双璧をなしており[93]，両者の言語上の覇権争いも熾烈な論争となって具現化していた。すでに見たが，Valdés が Nebrija をアンダルシア出身ということで激しく非難したのも，この一端と言えるだろう。

2.2.3.4. Fernando de Herrera

先述のセビーリャの詩人 Fernando de Herrera は，『Garcilaso の注解』(1580) において，宮廷語は「宮廷に出入りするいろいろの外国人によってもっとも腐敗を被った言語」あり，「最も適当でない，最も歪曲されたものである」と述べて，宮廷およびマドリッドの上流階級の言語を否定した[94]。

また Herrera は，アンダルシアの詩人たちを褒め讃える一方，カスティーリャの詩人についてはこれを除外，無視する記述を行っており，ラペサ（2004:340) はこれを，文学史上における「セビリア派の宣言」とみなしている。そして，Herrera と宮廷貴族でカスティーリャ語を擁護する Prete Jacopín が言語使用に関してやりあった非難の応酬は，Menéndez Pidal (2005 :913) のことばを借りれば，言語問題上の「南北戦争」の一端を露呈するものであった。Herrera は，ビルバオに首都が移っても，ビルバオの言語（バスク語）が最良とはならないという例[95]を出して，宮廷風の話し方と国中で広く話される言語，つまり共通語とを同一視することの妥当性を否定しており，カスティーリャ人でもアンダルシア人でも，スペイン中で等しく通じる言語が最良とみなされるべきであると主張したのである。したがって，この主張はことさらにアンダルシア方言の優位性を説くというよりは，カスティーリャ語のみを規範と認める風潮に抵抗を示すものであったと思われる[96]。

2.2.3.5. Ambrosio de Salazar

ムルシア出身の Salazar は，フランスで国王ルイ12世にスペイン語教師として仕え，1614年にスペイン語の文法書 *Espexo general de la Gramática en Diálogos* を著している。その中で彼は，「他のどの言語よりもアンダルシアのことばが心地よく，輝かしいカスティーリャ

92 Menéndez Pidal (2005:931) 参照。
93 フアン 2 世（在位 1406-1454）の宮廷ではすでにセビーリャの文学作品が際立っており，15，16 世紀の 2 世紀間に，最も文学活動が盛んであったトレドおよびマドリッドよりも多くの作家を輩出し，出版物の数も，サラマンカ，バルセロナ，トレドを上回った[Menéndez Pidal 2005:714]. また，Abad (2008:283) も，セビーリャが 1500 年以降，俗語文学の中心地となり，これにトレドとバレンシアが次いだとしている。バッジオーニ（2006:167）は，1600 年代にはセビーリャで 751 冊，トレドで 419 冊，バジャドリッドで 396 冊，マドリッドで 796 冊の書物が出版されたとしている。
94 Menéndez Pidal (2005:926) 参照。
95 Menéndez Pidal (2005:926) 参照。
96 Alonso (3ed.) (1958:85).

語でさえもこれに到達するものではない」とアンダルシア方言を称賛している[97]。

2.3. まとめ

15世紀末から,政治や文学の分野で俗語はラテン語に対して優位に立つことになったが,俗語の中のバリエーションのうち，どれが標準モデルとなるかをめぐる「言語問題はスペインにはなかった」といわれてきた。しかし実際には，トレド方言の優位を認めるか否かという議論が少なからずなされていた。そしてその中で，15世紀に国力を増したカスティーリャが早くから「スペイン」を代表する地位にあり，俗語の権威向上が唱えられ始めた時期は，このカスティーリャがアラゴンとの合併によってイベリア半島を統一し，さらに新大陸へと大きく雄飛していく時期であった。そのため，西ゴート王国時代から首都であったトレドのことばが,まず標準語のモデルとなることが当然視されたのである。ところが，少し時代が下り大航海時代にセビーリャが莫大な富を得て繁栄すると，この経済力を後ろ盾にセビーリャの作家たちも自らの文化的，言語的威信を高めようと，トレド語を俗語の標準とするトレド主義に異を唱え，アンダルシアの優位をうったえる運動が起こった。

3. カスティーリャ語からスペイン語へ

イタリアの言語問題では俗語モデルの論争には言語の名称の問題がつきまとったが，スペインでも「カスティーリャ語」という名称の妥当性をめぐって少なからず議論があった。

3.1. 国家言語としての名称

フランドル生まれの皇帝カルロス1世[98]は，1536年に，フランス王またはフランス大使であったマコンの司教に対して次のように述べたとされている：

> 「司教殿，もしそのお気持ちがおありなら，私のことばをご理解下さればよろしいのです。私の口からは我がスペイン語以外のことばを御期待なさいますな。我がスペイン語は実に高貴にして，キリスト教を信じる人々みなによって知られ，理解されるに相応しいものなのであります」[99]

これは，カルロス1世がそれ以後，スペイン語を外交の場で使用するヨーロッパの共通言語とする旨を宣言した，スペイン語の「国際語宣言」とみなされているが，スペインの国家的発展にともなって，欧州での政治外交上の要求からカスティーリャ語がにわかに国家語としての性格を強く帯びるようになったことを象徴的に示す出来事であったと言えよう。また，対外的に ‘español’ の名がふさわしくなっていく[100] 一方で，スペインの内側に視点を置けば，トレドからマドリッドへの遷都とセビーリャの台頭を背景にカスティーリャ地方

97　Menéndez Pidal (2005:934) 参照。
98　神聖ローマ帝国の皇帝としてはカルロス 5 世。
99　ラペサ（2004:311）より引用。ロダレス（2006:77-78）参照。
100 中世においても，対外的には ‘español’ が好まれた[Menéndez Pidal 2005:935].

の政治経済的重要性が低下し，そのことが特にアンダルシア人やバレンシア人をしてカスティーリャ語という言語名を拒否させることにつながったという風にも考えられるだろう。いずれにせよ，「スペイン語」という名称は，「16世紀以降は完全な市民権を得て，『カスティリア語』“lengua castellana” という名称の上位に位置することになった」[ラペサ2004:313]のである。

3.1.1. 著者不詳

この言語の名称の問題には，当時の文法家も言及している。Nebrija の後，初めて出版されたスペイン文法は，1555年にフランドルのリューベンで出たスペイン語の非母語話者向けの文法書[101]であったが，その著者は，‘Lengua Hespañola’[102] の名称を用いて，その理由を冒頭で示している。それによれば，その言語がスペイン語と呼ばれるのは「スペインの大部分においてそれが話されるから」[103]であり，これに加えて，本来的にはカスティーリャの言語であるからカスティーリャ語 ‘Castellana’ と呼ぶべきだが，ローマ人がかつてここを ‘Hespaña Tarracoñese’ [sic] と呼んだことから，‘Hespañola’ の名称がより妥当であると説いている[104]。

3.1.2. 著者不詳

同じくリューベンのもう一つの著者不詳の文法書 *Gramática de la lengua vulgar de España* (1559)[105] も，‘castellano’ という呼び方を避け，「スペインの俗語」‘Lengua vulgar de España’ を表題にも用いている。「スペインの全土で遍く話され理解されるから」[106]というのがその理由である。この著者は，カスティーリャの言語が繁栄しているのを認めているが，カスティーリャ語のみが栄えたのではなく，その前にプロヴァンス語[107] があり，さらにアラビア語が初めにあって，これら 2 言語の文学が，スペインの最初の文学であると述べている。さらに，カスティーリャの地がレオンとアラゴンの主導によってアラブ支配から奪回されたことを考慮して[108]，カスティーリャ語という名称を退ける[109]。

さらに，先述の Herrera も ‘castellano’ の名称を使わず，終始 ‘español’ を用いた。Alonso (3ed.) (1958:56) は，「カスティーリャの言語の質に関する特権性を最も公然と，情熱的かつ論理的に否定したのは，Herrera であった」と述べている。

---

101 *Util y breve institución para aprender los principios y fundamentos de la lengua Hespañola.* 以下，本稿では同文法書を Lovaina (1555) と呼ぶ。
102 ‘Española’ も用いられる。
103 Lovaina (1555:4).
104 Lovaina (1555:4) 参照。
105 以下，本稿では Lovaina (1559) と呼ぶ。
106 Lovaina (1559:6).
107 プロヴァンス語とカタルーニャ語を同一視している[Menéndez Pidal 2005:931].
108 Menéndez Pidal (2005:931). また，Lovaina (1555) 同様，Lovaina (1559) も著者不明だが，Menéndez Pidal (2005:930) はおそらくこの記述を一つの根拠として，この書がバレンシア人かアラゴン人による著作と推定しており，Alonso (3ed.) (1958:48-50) も著者はアラゴン人であるとほぼ断定している。
109 Lovaina (1559:6).

3.2. 伝統としての「カスティーリャ語」

一方，このような「スペイン語」という名称の普及をよそに，カスティーリャ人やカスティーリャの正統を支持する者は，伝統的な形容詞 ‘castellano’ を使用し続け，矜持を保とうとした。文法家 Gonzalo Correas は，その文法書の表題を *Arte de la lengua Española Castellana* (1626) とし，2 つの形容詞を併記しており[110]，様々な名称を随意的に同義語として用いている。

Real Academia Española の文法書に関しても，1771年の初版から1920年の第31版までは，表題は一貫して *Gramática castellana* であって，‘español’ や‘española’ が用いられるには，実に1924年の第32版まで待たねばならなかった。

しかし，全体的に見れば，やはりカスティーリャ語がスペイン語と同義語となるのは 16 世紀の間には完結していたと思われる。Menéndez Pidal (13ed.) (1968:2) や Abad (2008:206) に従えば，多くの優れた文学作品を生み，レオン語とナバラーアラゴン語という隣接する諸方言を吸収しつつ，地理的にその使用領域を拡大していったことが，カスティーリャ語の共通語（標準語）化につながったのである。Valdés (1535) の弁は，そのことを端的に示しているといえるだろう：

> 「カスティリア語はカスティリア全域だけでなく，アラゴン王国，アンダルシア全土を合わせたムルシア王国，そしてガリシア，アストゥリアス，ナバラでも話されている。しかも，カスティリア語は庶民の間にさえも広まっているが，それは，高貴な人々の間でならカスティリア以外のスペイン全土で同じように正しく話されているからである」[111]

結局，中世を通して，カスティーリャが他のスペインの地方に先駆けて国力を増し，レコンキスタにおいて中心的，主導的役割を果たしたこと，そしてその過程でカスティーリャ語の使用領域が拡大していったことがこの言語の優位性を決定づけたと考えらる。そしてその後の，アラゴンとの連合によるスペインにおいてもカスティーリャは政治の中枢であり，アラビアの支配以前から王国の首都として政治的，文化的に繁栄したトレドを首都に擁することがこの地の言語に権威をもたせることになったのである。さらに後には，セルバンテスなど黄金世紀の作家たちの活躍もあって，その優位が覆ることはなかった。結局，トレドのことばが最良のモデルとされ，これがカスティーリャ語を代表し，さらには「スペイン語」の代名詞となるに至ったのである。

3.3. まとめ

スペインの言語問題を概観すると，俗語の名称の問題は，イタリアにおける 3 項対立―

110 Correas (1626) の中では, ‘Lengua Castellana Española’, ‘Española Castellana’, ‘Lengua Castellana o Española’, ‘el Castellano i natural Español’, ‘el Español’, ‘Lengua Española’, ‘el Castellano’ が随意的に使用される[Menéndez Pidal 2005:936].

111 *Diálogo*, Lope Blanch (ed.) (1969:62), ラペサ（2004:313)。

すなわちフィレンツェ語（都市）－トスカナ語（地方）－イタリア語（国家）―ではなく，カスティーリャ語とスペイン語との 2 項対立であって，fiorentino に相当する toledano「トレド語」のような特定の一都市を基準とする名称は，最初から共通語の名称の候補とはならなかった。その意味では，スペインの言語問題において国家語の「名称の問題はほとんど重要でなかった」[Menéndez Pidal 2005:937] と言えのるだろう。しかしながら，どの方言が良いかという議論自体は相当にあったわけで，イタリアのようないわゆる「言語問題」がスペインに存在したことを否定することはできず，むしろイタリアの現象と密接に関係し，それがスペインでは独特の発展をしたと考えることが可能である。

4. 結論

最後に，本稿のまとめとして何点かを確認しておきたい。まず，イタリアの言語問題とスペインのそれとを比較して，それぞれの特徴，すなわち，何が最も核心的問題であったかを大略的に言えば，次のようになる。

イタリアでは 1300 年代に 3 大作家が輩出して以来，フィレンツェ語の権威は不動であり，そのこと自体を疑う者はいなかっただろうが，そのフィレンツェ語をフィレンツェあるいはトスカナだけの言語とし，それ（つまり純粋のフィレンツェ語）をそのまま全イタリアの標準語に昇華させようとする立場と，反対にそれをイタリア共通の財産として共有しようとする，つまり，あくまで折衷統一言語の一母体としてフィレンツェ語をとらえようとする立場，この 2 つの姿勢の違いが，言語問題の根本であると考えられる。

そして最終的に，クルスカのようなフィレンツェ語の純潔を保とうとする勢力が優勢となってゆくが，そこに至るまでに，フィレンツェの絶対優位に対する抵抗があって，それにはやはり当時のイタリアの小国分立の体制が，文化面においても諸国が競合する土壌を用意していたという点が，イタリアの言語問題の特徴であったと思われる。このことは，バッジオーニ（2006:167）が，「『言語問題』とは，（したがって,）共通語出現のための枠組みとなる国民国家的な構造がイタリアにおいては不在であったという事実を反映したものに他ならなかった」と述べている通りであろうが，これに私見を加えるならば，俗語間の競合においては，各方言が単体でフィレンツェ語に抗しようとしたというより，他の俗語とともに自らも共通イタリア語の構成要因となろうという，ある意味打算的な姿勢，換言すれば，とにかくフィレンツェ語一つだけが突出するという事態をよしとしない風潮があったのだと思われる。トスカナ語という名称も，フィレンツェという都市名を嫌ってのことであり，共通イタリア語や宮廷語という概念も，結局はフィレンツェ語の排他的優位を回避したいということではなかったか，と考えられるのである。

これに対してスペインの場合は，ラテン語との関係において，俗語がいかにしてラテン語のような文化言語になるかという，俗語の権威の問題が主軸であり，俗語同士の覇権争いよりも重要であったように思われる。Nebrija は，古典ラテン語の復興と同時に，俗語の顕揚もイタリア人文主義から受け継いだが，それはルネサンスのもう一つの思潮である自然主義ゆえのことではなく，愛国主義的な発想のゆえであった。そして，彼が俗語文法を

著したのは，この愛国主義に加えて，古典ラテン語に牽引される形で俗語もそれと同じ高み，つまり文法の成文化という域に達しなければならないという規範の意識が，その動機としてあったと思われる。これは，文化言語となるためには，ラテン語に備わっている権威を俗語も確固たるものとして備えているべきで，そのためには文法の成文化すなわち規範化を経験しなければならないという，あくまでラテン語基準の発想であったといえるだろう。偉大な言語である古典語に対する劣性をいかに克服するかという点が，Nebrija にとっては重大であったのではないかと考えられるのである。

また，スペインの場合は，15 世紀末のルネサンスの時期に，政治的にはイタリアの小国分立のような環境はなく，むしろカスティーリャを中心とする中央集権国家として発展していく時期であったので，言語をめぐる思想も帝国主義的あるいは中央集権的な傾向が非常に強いということが，特徴として挙げられる。したがって，スペインの言語問題は，俗語の権威がカスティーリャ語に一極集中し，カスティーリャ語が単独で共通語となる言語統一の方向へと突き進んだ観がある。そしてその随伴的現象として，カスティーリャ語の圧倒的優位に対する反発が散見されたというのが，言語問題のあらましであったということができるのではなかろうか。

参考文献

Alonso, Amado, 1938, 3ed.1958, *Castellano, español, idioma nacional. Historia espiritual de tres nombres,* Losada, Buenos Aires.

Alvar, Manuel (dir.), 2000, *Introducción a la lingüística española*, Ariel, Barcelona.

Anónimo, 1555, *Util y breve institución para aprender los principios y fundamentos de la lengua Hespañola,* edición con Estudio e Índice de Roldán, A., 1977, C.S.I.C., Madrid.

Anónimo, 1559, *Gramática de la lengua vulgar de España,* edición y estudio de De Balbín, R. y Roldán, A., 1966, C.S.I.C., Madrid.

Asencio, Eugenio, 1960, ‘La lengua compañera del imperio. Historia de una idea de Nebrija en España y Portugal’, *Revista de Filología Española*, 43.

Bahner, W., 1966 *La lingüística española del Siglo de Oro*, Ciencia Nueva, Madrid.

Bembo, Pietro, 1525, 3ed.1548, *Prose della volgar lingua*, Appresso Lorenzo Torrentino stampator ducale, Firenze.

Carrera de la Red, A., 1988, *El "problema de la lengua" en el humanismo renacentista español,* Caja de Ahorros y Monte de Piedad, D.L., Valladolid.

Castiglione, Baldassare, 1574, *El Cortesano*, edición de Cano, 2009, Espasa-Calpe, Madrid.

Castro, Américo, 1925, 2ed.1987, *El pensamiento de Cervantes*, Crítica , Barcelona.

Correas, Gonzalo, 1626, *Arte de la lengua española castellana*, edición y prólogo de Alarcos García, E., 1954, C.S.I.C., Madrid.

García Dini, E.,(ed.), 2006, *Antología en defensa de la lengua y la literatura españolas (siglos XVI y XVII)*, Cátedra, Madrid.

Girón Alconchel, J., 1986, 'Nebrija y las gramáticas del español en el Siglo de Oro' en Quilis y Niederehe (eds.), 1986.

—, 2000, 'Hitoria de la gramática en España' en Alvar (dir.), 2000.

Gómez Asencio, J. J. ,2006, *Nebrija vive*, Fundación Antonio de Nebrija, Madrid.

González Ollé, F., 1978, 'El establecimiento del castellano como lengua oficial', *Boletín de la Real Academia Española*, 58.

—, 1988, 'Aspectos de la norma lingüística toledana', *Actas del I Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española*, Arco Libros, Madrid.

Hernández Alonso, C., 1993, 'El concepto de norma lingüística en Nebrija: pervivencia y superación', *Anuario de Letras*, 31, Universidad Nacional Autónoma de México.

Kukenheim, L., 1932, *Contributions à l'histoire de la grammaire italienne, espagnole et française à l'époque de la Renaissance,* Amsterdam.

Lapesa, R., 1981, *Historia de la lengua española*, Gredos, Madrid.

Lotti, G.,2000, *L'avventurosa storia della lingua italiana. Del latino al telefonino,* Bompiani, Milano.

Menéndez Pidal, R.,1945, *Castilla. La tradición. El idioma*, Espasa-Calpe, Madrid.

—, 5ed.1968, *La lengua de Cristóbal Colón*, Espasa-Calpe Argentina, Buenos Aires.

—, 2005, *Historia de la lengua española,* I, Gredos, Madrid.

Migliorini, B., 1969, *Historia de la lengua italiana,* Gredos, Madrid.

Moreno Fernández, 2005, *Historia social de las lenguas de España*, Ariel, Madrid.

Nebrija, Antonio de, 1492, *Gramática Castellana*, edición de Esparza, A. y Sarmiento, R., 1992, Fundación Antonio de Nebrija, Madrid.

Nieto Jiménez, Lidio (1997) '¿Nuevo siglo de oro en el estudio del español?' *Actas del VIII Congreso Nacional de ASELE*.

Padley, G. A., 1985, Grammatical Theory in Western Europe 1500-1700. Trends in vernacular grammar, I, II, Cambridge University Press.

Pastor, J. F., 1929, *Las apologías de la lengua castellana en el siglo de oro,* Madrid.

Quilis, A. y Niederehe, H.-J. (eds.), 1986, *The History of Linguistics in Spain*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam / Philadelphia.

Ramajo Caño, A., 1993, 'La norma lingüística y las autoridades de la lengua: de Nebrija a Correas', *Anuario de Letras*,31, Universidad Nacional Autónoma de México.

Romera-Navarro, M., 1929, 'La defensa de la Lengua española en el siglo xvi', *Bulletin Hispanique,* 31.

Sánchez, A., 1992, *Historia de la enseñanza del español como lengua extranjera,* SGEL, Madrid.

Sarmiento, R., 1992, ‘La teoría de la corrupción en Antonio de Nebrija (1492)’, *Bulletin Hispanique*, 94-2.

Tesi, R., 2001, *Stroria dell’ italiano. La formazione della lingua comune dalle origini al Rinascimento,* Laterza, Roma.

Valdés, Juan de, 1535, *Diálogo de la lengua*, edición, introducción y notas de Lope Blanch, J. M., 1969, Castalia, Madrid.

Villalón, Cristóbal de, 1558, *Gramática castellana. Arte breve y compendiosa para saber hablar y escrevir en la lengua Castellana congrua y deçentemente,* edición y estudio de García, C., 1971, C.S.I.C. , Madrid.

Yllera, A., 1989, ‘Nociones aspectuales en la gramática francesa del siglo XVI: las clases semánticas de verbos’, *Homenaje a Alonso Zamora Vicente,* I, Castalia, Madrid.

——, 1998a, ‘Rivalidades lingüísticas franco-españolas en el siglo XVI’, *EPOS*, 14.

——, 1998b, Revindicación y confrontación de las lenguas vernáculas en el siglo XVI (Francia-España), *VII Coloquio APFFUE*, Universidad de Cádiz.

青木洋一郎，1999,「ダンテの言語論におけるラテン語と俗語」，イタリア学会誌, 49.

秋山余思，1958,「「俗語論」について」，イタリア学会誌, 7.

安達直樹，2011,『スペイン文法（1492－1796）における副詞』，大阪大学言語社会学会.

天野恵，1979,「Cortegiano における言語論争の背景」，イタリア学会誌, 27.

アリギエーリ，ダンテ，岩倉具忠訳，1984,『ダンテ俗語詩論』，東海大学古典叢書.

池上 俊一，2009,『原典 イタリア・ルネサンス人文主義』，名古屋大学出版会.

榎本武文，1999,「ルネサンスにおけるキケロ主義論争」，一橋研究，36，一橋大学.

大黒俊二，2010,『声と文字』，岩波，東京.

糟谷啓介，1985,「16 世紀イタリアの＜言語問題＞」，一橋研究，10(3)，一橋大学.

カスティリオーネ，清水純一他訳，1987,『宮廷人』，東海大学.

カストロ，アメリコ，本田誠二訳，2003,『セルバンテスの思想』，法政大学出版局.

ガレン，エウジェニオ，澤井繁男訳，2011,『ルネサンス文化史-ある史的肖像』，東京，平凡社.

清水憲男，1987,「ネブリハ論序説」,『思想』，762，岩波，東京.

セルバンテス，会田由訳，1979,『ドン・キホーテ』，東京，集英社.

——，永田寛定訳，（第 27 刷），1998,『ドン・キホーテ』後編（一），岩波，東京.

——，本田誠二訳，1999,『ラ・ガラテア/パルナソ山への旅』，行路社，滋賀.

谷口勇，1995,「マキアヴェッリの言語論」，立正大学文学部研究紀要，11.

デッラ ヴァッレ，ヴァレリア・パトータ，ジュゼッペ，草皆伸子訳，2008,『イタリア語の歴史―俗ラテン語から現代まで』，白水社，東京.

中川光，1992,「宮廷語論の諸相 －Trissino と Castiglione－」，イタリア学会誌, 42.

ネブリハ，エリオ・アントニオ・デ，中岡省治訳，1996,『カスティリャ語文法』，大阪外国語大学学術研究書 14.

バーク，ピーター，原聖訳，2009,『近世ヨーロッパの言語と社会―印刷の発明からフランス革命まで』，岩波，東京.
バッジオーニ，ダニエル，今井勉訳，2006,『ヨーロッパの言語と国民』，筑摩書房，東京.
ラペサ，ラファエル，中岡省治他訳，2004,『スペイン語の歴史』，昭和堂，京都.
ロダレス，ホアン・ラモン，三好準之助訳，2006,『セルバンテスの仲間たち－スペイン語の話者の歴史－』，柳原出版，京都.

(2012. 01. 12 受理)